

だい かい
第15回

「いつもありがとう」

作文コンクール入賞作品集

2021

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／山崎正毅／清田 哲



シナネンホールディングスグループ のこと知っているかな？

皆さんの身近なところで活躍しています！

「いつもありがとう」作文コンクールを主催しているシナネンホールディングスグループのこと、みなさんはどんな会社か知っていますか？

実は、みなさんの住まいや暮らしのなかで役立っていたり、社会を支えたりしています。その製品や事業について紹介します。



「いつもありがとう」作文コンクール主催企業

シナネンホールディングスグループ
シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ ミライフ東日本
日高都市ガス シナネン シナネンサイクル シナネンモビリティPLUS
シナネンエコワーク シナネンゼオミック ミノス タカラビルメン
インデス シナネンファシリティーズ

シナネンホールディングス株式会社
本社：東京都港区三田三丁目5番27号 住友不動産三田ツインビル西館6階



ありがとう作文

第15回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2021) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(気象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

山崎 正毅(シナネンホールディングス株式会社)

清田 哲(朝日小学生新聞)

最優秀賞

一日お母さん

能美にな……………4

シナネン賞

「うちのちようなんは左きき」

島田 潤……………6

ミライフ賞

おばあちゃんのミッション

安田 彩乃……………8

朝日小学生新聞賞

四つ顔のスーパーウーマン

小田 孝太郎……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

おとうさんへありがとうのきんメダル

久能 和佳……………12

まほうのポケット

浅野 智博……………14

ピッカピカがえし

延興 晟一良……………16

〈高学年の部3編〉

「たくさんの、ありがとう」

母の笑顔と手

祖父にささげる金メダル

寺奥 真緒……………18
松本 龍輝……………20
安田 悠真……………22

団体賞(6団体)

【福島県】 須賀川市立義務教育学校稲田学園

【茨城県】 八千代町立中結城小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【広島県】 福山市立金江小学校

【徳島県】 石井町石井小学校

【福岡県】 福岡市立田島小学校

主催・シナネンホールディングスグループ

朝日学生新聞社

後援・文部科学省 朝日新聞社

●応募総数二五、七三〇作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ「作家」

毎年、最終審査に残った作品を読むたびに、わたし自身が励まされ支えられる気がします。今年、特にその気持ちが強かったです。どの作品からも、前を向いて生きる力を感じました。周りの人たちに「ありがとう」と感謝することは、未来に向けて生きて行くことなんだなあ、みなさんの作品から教わりました。みなさんにも苦しいことや嫌なことは、いつばいあるはず。それを吹き飛ばす、みなさんと「ありがとう」のパワーに感動しています。

もりた まさみつ 「気象予報士」

今年のコンクールは兄弟姉妹への感謝の気持ちの作文が強く印象に残りました。コロナ禍の影響もあるのかもしれませんが、家族と一緒過ごす時間が長くなり、その分家族との繋がりが深まったのでしょうか。またリモートワークなどの作品も新鮮でした。あらためて、この作文コンクールが社会を映し出す鏡のような役割も持っているのではと思いました。

こじま なつこ 「フリーアナウンサー」

今年も読み応えのある力作揃いで、審査に頭を悩ませました。どの作品にも、思いやり、いたわり、感謝の気持ちが見られていて、それらの気持ちを持つ子どもは、そばには必ず見守り、温かい声がけができる大人がいるのだと強く実感しました。

窮屈な生活を強いられている昨今ですが、皆さんの作品が

ら「心をほぐす優しい言葉」にたくさん触れたことは、私も幸せな気持ちになりました。

やまざき 山崎 正毅

「シナネンホールディングス株式会社」

小学生の皆さんの作品には、読み手である大人達に、大人の日頃の何気ない行動の一つに、子ども達は我々が思っている以上の感受性を持って反応し、自分の家族への愛情と感謝の気持ちがあるのだという事を、改めて感じさせてもらおうと共に、すがすがしい気持ちにさせてくれる力があります。小学生の皆さんの心温まる作品を通じて、常日頃から自分自身に関わる人への感謝の気持ちを持つことの大切さを改めて教えていただけただけ、そんな気持ちになります。

毎年、全国から本場に素敵な言葉の贈りものがあります。ありがとうございます。私からも皆さんに「ありがとう」の気持ちを送りたいと思います。

きよた 清田 哲

「朝日小学生新聞」

今回も全国からたくさんの「ありがとう」が届きました。お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん……。一人一人のありがとうの思いが、原稿用紙からあふれ出ていました。

作品を読みながら思わず私も、みなさんのことを想像して、「ありがとう」とつぶやいていました。

すべての作品の「ありがとう」はキラキラ輝く金メダル。

(順不同敬称略)

いちにち
一日お母さんのう
能美にな

わたしはお母さんと二人家ぞくだ。いつもお母さんが家のことをしてくれる。ある休みの日、わたしは「お母さん」のやくをかわってみることにした。「一日お母さん」だ。

けっ行の日をきめたら、まずはじゅんび。お母さんの行どうをじっくりかんさつする。ふむふむ、おふろは前の日のよるにあらうんだな。あらかじめコツを聞いておいたものもある。お母さんがかかさなひのはトイレそうじだ。つわりがひどかった時トイレで長い長い時間をすごし、その後ぶじにわたしが生まれたので、おれいの気もちでそうじをしているらしい。そうじはたなの上から下へ。もちろんゆかやべんきのうらもわすれずに。りょうりは、おばあちゃんに教えてもらってけいかくをたてた。あとは、けっ行の日までお母さんのよこでいろいろと見学したり、道ぐのばしよをおぼえたりした。

さあ、いよいよ「一日お母さん」の日。ルールは二つ。りょうりする時はかならず声をかけること。一人で火をつかわないこと。

まずはねているお母さんをおこす。今日はわたしがお母さん。名前でよんであげるんだ。「ななちゃんおきて、朝だよ」。

ほんやりとおきてきたお母さんをせ中にかんじながら、わたしは朝ごはんに目玉やきをつくる。できあがったら、食べる前にせんたくきのスイッチを入れに行く。ごはんを二人で食べおわったら、ちようどせんたくきからおわりの合図がきこえた。ペランダでしわをのびしながらきれいにほす。そうじきかけにトイレそうじ。うん、なかなか上手にうごけている。すこし時間があったので、パソコンでしごとをしているお母さんに「ななちゃん、ちよつと休けい、おちゃんにしましよ」と声をかけ、こうちやを入れた。

いよいよ本日のメイン、ばんごはん。メニューはかわらそば。お肉、それからうすやきたまご。さいごにつくったうすやきたまごはあつくてさわれず、さめるまでじつとまつというもつたない時間をすごしてしまった。そばをほぐす水をよういするのかわすれしまし、水をとりに行っている間に、なんと、そばがこけてしまった。さいごのさいごにさんさんだ。そういえば、お母さんは先にたまごをつくって、さましている間にお肉をいためたりそばをほぐしたりしていたな。一つ一つはできていても、じゅんばんをまちがえたと空き時間がふえたり、たりなかつたりするんだな。おふろもちゃんと前の日のよるにあらっていたつけ。まるで時間のパズルだ。

「一日お母さん」はあつというまだった。じゅんびの時間のほうが長かった。「お母さん」は一日だけではできない。つながった毎日の時間をうまく組み合わせてなりたっている。

そう、お母さんは一日にしてならず。
お母さん、いつもありがとう。

評価のポイント

母に対する素直な気持ちを読んだ人の心にスツと届く、すこく明るくて素敵な作品。

「うちのちようなんは左きき」

島田 潤

うちのちようなんはじつはぼくです。でもパパはいつもじぶんがちようなんだといっています。なぜならアイスやおかしをたべるときぼくよりいっぱいいたべるしテレビもパパがすきなばんぐみばかり見るからです。それでぼくはパパとけんかをしたり、おこつてぼくがなくときもあります。

でもぼくはパパが大すきです。パパはやさしくておもしろいです。しごとがいそがしくてもじかんがあつたらたのしくあそんでくれるし、ママからおこられていやなときはパパがなぐさめてくれます。

ぼくのパパはあかるくていつもえがおです。でもパパは右手がつかえないしやがいです。バイクじこで大ケガになって左ききになったのです。それでパパはぼくが赤ちゃんのときめんどろを見るのができなかつたとききました。

たしかにぼくがちようなん生のときとだちのおとうさんたちが「パパ先生」になるためにまいしゅうようちえんにきたけどぼくのパパは一どもきたことがありませんでした。うんどうかいのつなひきもおとうさんたちがさんかしましたがパパはでれなかつたです。そのときはぼくがまだ小さかつたのでちよつとさびしかつたです。

だけどいまはだいじょうぶです。パパとこうえんであそぶときキャッチボールはできないけどバドミントンはたのしくできます。おでかけのときはじてん車はむりだけど車のうんてんはじょうずです。ぼくが赤ちゃんのときはいっしょにふるには入れなかつたけどいまは二人でふるでいっぱいあそびます。

ぼくのパパは左ききなのでこれからもまだできないことがあるとおもいます。でもぼくがどんどんおおきくなるからつだつてあげることもどんどんおおくなるとおもいます。それでこれからぼくがパパの右手になれるとおもいます。

「パパ、これからはぼくがパパの右手になるよ！そしてうちのちようなんはぼくだから、よろしくね！」

おばあちゃんのミッシヨン

安田 彩乃

わたしの心の栄養は、おばあちゃんがくれるお手紙です。お手紙には、わたしがうれしくなる言葉がたくさん書いてあります。「毎日、学校をがんばっているね。」や、「来週、花火大会があるから来てね。」というものです。わたしは、おばあちゃんのお手紙を読むと、心がほかほかになって、元気がわいてきます。

そして、もう一つ。おばあちゃんのお手紙には、わたしが少しがんばったらたっせいできるやくそくが書いてあります。たとえば、「今日はお母さんのお手伝いを三こしてね。」や、「ばんごはんは、いつもより一口多く食べよう。」ということですよ。わたしは、それを、「おばあちゃんのミッシヨン」とよんで、いつも楽しみにしています。

ミッシヨンがかんりようしたら、おばあちゃんに電話をします。おばあちゃんはいつも、「すごいすごい。がんばったね。」

とほめてくれます。わたしは、おばあちゃんにほめてもらうことが、どんなごほうびよりもうれしいです。そして、次のミッシヨンをもらうのが、楽しみで仕方ありません。

おばあちゃんは、たっせいできそうにないミッシヨンは出したことがあります。「次の算数テストでは百点を取ろう。」ではなく、「今日は計算のまちがいを一つなくそう。」
「明日は文章をよく読んで問題をとこう。」というように、一歩ずつミッシヨンが進んで行

きます。そして、いつのまにか、テストでも良い点数が取れているのです。これには理由があって、わたしのたっせいしたときのよろこびを何でも味わってほしいからだそうです。たしかに、毎日ミッシヨンをかんりようした方が、がんばろうという気持ちがつづくし、よろこびもたくさん味わえます。わたしが

「さすがおばあちゃん。わたしの事、何でも知っているね。」
と言っていると、

「ゆうしゆうなクライアントですから。」

と言っつわらっています。わたしは、その時のおばあちゃんのエ顔が本当に大好きです。

今月は、おばあちゃんの体調が悪くて、ミッシヨンが止まったままです。だから今は、わたしがクライアントになって、おばあちゃんにミッシヨンを出しています。今日のミッシヨンは、「お日さまを一分間あびること。」です。おばあちゃんはミッシヨンを楽しんでくれています。おばあちゃんからミッシヨンかんりようの電話があるたび、わたしはうれしくてたまりません。おばあちゃんといっしょに、元気を取りもどしている気持ちになります。こんなよろこびを味わせてくれるなんて、おばあちゃんはやっぱり、ゆうしゆうなクライアントです。わたしはこれからも、おばあちゃんのミッシヨンをかんりようしながら、心も体もせい長していきたいと思います。おばあちゃんには、感しゃの気持ちでいっぱい

評価のポイント

ミッシヨンを通して家族の絆を深めていく姿がとても素敵。心から感動できる作品。

四つの顔のスーパーウーマン

小田 孝太郎

「だれも自分を生んでくれと頼んでない。」

と大声で母に向かって、とんでもないことを言った。ぼくは、反抗期真っ只中なのか、母の言葉一つ一つにイラッときたり、モヤモヤしたりする。その後、一人になり大好きな四コマ漫画を描いてクールダウンしていた。母の顔を四つ描いた。吹き出しに何と書くか迷っていたら、四つの顔をもつ母が浮かんだ。

一・小学校の教壇に立つ四年生の担任の先生。

二・ぼくの所属する陸上クラブの役員の会長。

三・娘として年老いた両親を世話する介護人。

四・ぼくのお母さん。

ぼくの母は、毎日忙しく動き回っている。

小学校の先生をしている母の手は、おしゃれなお母さんのネイルをした手とちがって、赤ペンや絵の具や版画のインクがついていることがある。帰ってからも行しか書いていない日記に、いっぱい返事を書いている。今はコロナの影響で、オンライン授業の準備に追われている。だから益々おしゃれから遠のいているが、教師という仕事が好きで誇りを持っているらしい。そこで吹き出しに、日本一の小学生の先生はこの私ですと書いた。

ぼくの所属する陸上クラブは、コーチと保護者がボランティアのため、会長の母は日が沈む

とライトを照らしたり、バトンを消毒したりしている。レクリエーションがコロナのため難しい中、盛り上がる内容のレクリエーションを考え、実行してくれた。保護者の中心となって頑張っている。そこで吹き出しに、日本一のスポーツクラブの保護者代表の会長はこの私ですと書いた。

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃん。最近もの忘れが多くなったり、同じことを繰り返し言ったりするようになった。ぼくはつい、「さつきも同じことを言ったよ。」

と言ってしまふ。おばあちゃんとおれだけ口げんかしていた母は、同じことを聞いても初めて聞いたかのようにふるまっている。理由を聞くと、物忘れが進んでいる人に強く否定するようなことを言うのではなく、時には優しいいうそも必要であるからと教えてくれた。自信をなくさないように、温かく両親のお世話をしている日本一の介護人はこの私ですと書いた。

そして、ぼくのお母さん。相変わらず雷が落ちることもあるし、小言も多いので、すぐ反発してしまふ。最近では、反発しても昔みたいに怪獣のように怒らなくなったが、それが寂しくも思えるのはなぜだろう。でも、ぼくが大会でベストを出すのと泣いて喜ぶ、悲しいことがあると一緒に解決策を真剣に考え、背中を押してくれる。日本一のぼくの応援団長はこの私ですと書いた。

こうして四コマ漫画が完成した。四つの顔をもつ日本一のスーパーウーマンの母だ。この四コマ漫画を「ありがとう」にかえてそっと渡した。母は大粒の涙と最高の笑顔だった。

評価のポイント

四つの顔をもつ母をしっかりと観察している。自分の思いを丁寧に表現している点も素晴らしい。

おとうさんへありがとうのきんメダル

久能 和佳

なつやすみに、かぞくみんなで、テレビでとうきょうオリンピックをみました。わたしは、こえがかるるぐらいおうえんしました。がんばったせんしゅたちが、むねにかけているメダルは、きらきらかがやいていました。わたしは、いつも、かぞくのためにおしごとをがんばっている、たんしんふにんのおとうさんにも、メダルをあげたいとおもいました。せかいに「っしかない、わたしからの「オリジナルきんメダル」です。

おとうさんがきんメダルをとれるきょうぎはなんだろう。いろいろとかがえてみました。「パソコンはやうちせんしゅけん」かな。これはなかなかいいところまでいけるとおもいます。「あさのはやおききょうぞう」かな。おとうさんは、たんしんふにんをしているから、げつようびのあさ、ものすくはやくおきてしごとへでかけていきます。これもメダルのかのうせいがたかいです。でもやつぱりわたしからきんメダルをあげるとしたら、これ。「ねかしつけきょうぎ」です。おとうさんは、かえってくるかならずわたしといっしょにねてくれます。わたしは、おとうさんとねるのがだいすきです。おもしろいおはなしをしてくれるし、やさしくトントンしてくれるからです。おかあさんとねるのもいいけれど、おとうさんはとくべつです。たんしんふ

にんで、「しゅうかんに二かいくらいしかいっしょにねられないので、わたしはおとうさんがかえってくるひをたのしみしています。おとうさんといっしょにベッドにはいると、もつとおはなしをきいていたのに、すぐにねむくなってねてしまいます。ふしぎです。おかあさんは、「おとうさんがくると、あんしんするから、ねむくなるんじゃない。」

と、いいます。おとうさんには、かぞくみんなをほっとさせるパワーがあるのかもしれない。だから、このきょうぎは、わたしにとって、おとうさんがまちがいなくきんメダルです。おとうさんに、わたしからとびきりのきんメダルをぞうていします。ばちばちばち。

おとうさんがしごとをつごうでかえってこられないとき、わたしはさみしくてなみだがでます。そんなときは、おとうさんとでんわやビデオつうわをして、はなしをきいてもらいます。おとうさんは、

「わかはんぱりやさんだね。おとうさんも、わかにまけないように、おしごとをがんばるよ。こんど、いっしょにねようね。」

と、いってくれます。おとうさんのにこにこがおにもきんメダルをあげたくなります。

おとうさん、いつもありがとう。わたしもべんきょうやおかあさんのおてつだいをがんばるよ。こんどかえってきたら、おりがみできんメダルをつくって、ひょうしょうしきをやってあげるね。そして、またわたしのベッドでいっしょにねようね。

まほうのポケット

浅野 智博

ぼくのお母さんは朝からよくおこる。「早くおきて。早く食べて。テレビをけして。しゅくだいをやって。はをみがいて。電気をけして。」ずっとそんな毎日だった。

ある日、お姉ちゃんと言った。ぼくはお姉ちゃんをたたいて、お母さんにおこられた。「お姉ちゃんもたたいた。」と言った。お姉ちゃんもお母さんにおこられた。ぼくは、お姉ちゃんにあやまるのがいやだった。

しばらくして、お姉ちゃんがカレンダーのうらに、紙でいくつものポケットを作り出し出した。そして、そのポケットにかぞくの名前や天国のじいじの名前を書いて、何か紙を入れていった。ぼくの名前のポケットの中には、お姉ちゃんからの手紙が入っていた。

「先はごめんね。」と書いてあった。

ぼくもお姉ちゃんのまねをして、カレンダーのうらに、いくつもの紙のポケットを作った。かぞくの名前を書いた。手紙を書こうと思ったら、お姉ちゃんやお母さんやじいじやばあばやお父さんのやさしいところが、うかんできた。ちよつと、はずかしいけれど、お姉ちゃんのまねをして、ハートをいっぱいいてみた。

ぼくもお姉ちゃんに、「ぼくもごめんね。」と手紙を入れてみた。お姉ちゃんがポケットの中を見て、「いっしょにあそぼう。」と言ったので、「いいよ。」とぼくは言った。お姉ちゃんといっしょに、手紙を書いた。お母さんにも、「お母さん、手紙を書いたよ。」と言って、「やさしくおこつてね。」という手紙を入れてみた。

お母さんからぼくのポケットに手紙がやって来た。「いつもおこつてばかりでごめんね。よくなつてほしいからおこるんだよ。大すきだよ。」と書いてあった。

その次の日も、またその次の日も、いつもお母さんは、朝からおこっている。だけど、なかお母さんが、ぼくのために、おこっているんだと思うようになって、ぼくはおこることもまあいいかと思うようになった。

「ぼくはお母さんが大すきだよ。やさしくおこつてくれたら、もっといいお母さんになれるよ。」と書いて、お母さんのポケットに入れてみた。それから、手紙は来なくなったけれど、お母さんがおこるとき、すこしやさしくなったような気がする。

お姉ちゃんが作ったまほうのポケットは、なんだか心がポカポカするふしぎなポケットだ。「ぼくは、かぞくが大すきだよ。いつもありがとう。」なんて、はずかしくて、言えないけれど、ぼくの本当の気もちだ。その手紙を、お父さんのポケットに入れてみた。まだお父さんは、気づいてないみたいだけど、ぼくの心は、なんだかポカポカしている。

「お姉ちゃん、まほうのポケットを作ってくれてありがとう。夏休みに、ばあばのおうちへ、まほうのポケットをもって行こうね。」

ピッカピカがえし

延與 晟一良

ぼくは、まだ一どもお母さんのおべん当をのこしたことがあります。毎日、ピッカピカに食べます。お母さんは、

「いつもおべん当、ピッカピカに食べてくれてありがとうね。」

と言ってくれます。ぼくも、本当は、

「いつもおべん当作ってくれてありがとう。」

と言いたけれど、てれくさいので言えません。

ぼくは、お母さんのおべん当はぜったいにのこさない、ときめています。ぼくがきめたルールです。お母さんは、毎朝5時半におきて、ぼくとお父さんと弟のおべん当を作るので、のこしたらわるいと思うし、おべん当をピッカピカでかえすのは、ぼくのお母さんへの「ありがとう。」の気持ちだからです。

一年生の時、ぼくは食べるのがおそくて、ごち走様の時間に合わない時がありました。お母さんは、おべん当に、ぼくのこうぶつをいっぱい入れてくれました。こうぶつがいっぱいと、早く食べれるからです。ぼくは、だんだん早く食べれるようになって、十分でかん食

できるようになりました。

でも、二年生になった時、ぼくのおべん当に、とつぜん、ぼくのいが手な野さいが入ってきました。でも、ぼくは、おべん当はぜったいにのこさないときめているので、がんばって食べます。

「今日、おべん当にオクラが入ってたけど。」

と言うと、お母さんは、とほけて、

「そお？でも、今日もピッカピカに食べてくれるやん。すごいやん！」
と言いました。

ぼくは、気づきました。お母さんは、わざとぼくのおべん当に、ぼくのいが手な野さいを入れてきます。きつと、ぼくのピッカピカがえしの気持ちに気づいていて、ぼくがおべん当をぜったいにのこしないと分かっているからです。一年生の時、おべん当を早く食べれるようになったので、今どは、にが手な野さいを食べれるようになってほしい、とお母さんは思っています。にが手な野さいが入っている時、ぼくはお母さんの気持ちを思い出します。ぼくは、お母さんの気持ちに気づいているから、これからも、お母さんのおべん当はぜったいにのこさないし、毎日ピッカピカでかえます。

ぼくのピッカピカがえしは、「お母さん、いつもありがとう。」の気持ちです。

「たくさんの、ありがとう」

寺奥 真緒

私のお母さんは、「介護施設」で働いています。どんな仕事をしているのか興味があった私は、お母さんに話をして、ボランティアへ行きました。

介護施設へ行くのは、初めてで、少し緊張していました。そこには、車椅子に座っている人、杖を使っている人、手足が不自由な人がいました。

私は始めに、皆さんに、お茶とおしほりを配りました。すると、車椅子に座っている、おばあさんが、私の手を握って

「こんな、かわいい子が、お茶を持って来てくれてうれしい。ありがとうね」

と、とても優しい笑顔で言ってくれました。私は、本当にうれしくて、ドキドキしていた気持ち

ちが、ホッとしました。

次に、お母さんが働いている姿を見学しました。お母さんは、車椅子を押したり、トイレへ一人でいけない人のお手伝いをしたり、ご飯を食べるお手伝いをしたり、とても忙しそうに汗を流して、働いていました。でも、お母さんは、キラキラした笑顔で、

「大丈夫ですか？何でも言ったださいね」
と、皆さんに声をかけていました。色々な、おじいさんや、おばあさんが、

「ありがとうね。本当に助かるよ。ありがとう」

と、手を合わせたり、困っていた顔を笑顔にして言っているのを見て、「お母さんは、と

ても素てきななあ。かつこいいな」と思いました。

私も、勇気を出して、色々な人に、

「困った事はないですか？大丈夫ですか？」

と声をかけました。一人のおばあさんの杖がたおれていたので、渡してあげると、

「取ってくれたんやね。届かなくて、困ったのよ。ありがとうね」と優しい顔で言ってくれました。私は、とてもうれしい気持ちになって、

「こちらこそ、ありがとうございます」
と伝えました。

私は、こんなに、たくさんの人に「ありがとう」と言われたことはないし、何でも当たり前だと思っていて、心をこめて、「ありがとう」と伝えてないことに気が付きました。

お母さんは、仕事から帰って来て、疲れていても、ご飯を作ったり、私達のために、家の用事をしてしてくれます。そんなお母さんに、心を込めて、

「いつも、ありがとう」

と伝えました。すると、お母さんは、

「元気でいてくれて、ありがとうね」

と笑顔で言ってくれました。

お母さんの仕事のボランティアへ行ったことで、たくさんの「ありがとう」を聞いて、意味を知ることが出来ました。何気ない毎日や、いやな事があった時も、「ありがとう」の一言が、人を笑顔にして、優しい気持ちになることに気が付きました。心から、素てきな「ありがとう」が言える人になりたいです。

母の笑顔と手

松本 龍輝

ほくのお母さんの手は、きれいにマニキュアがぬらされてるわけでもなく、キズがないわけでもなく、毎日ハンドクリームをぬっているのに、すごくあれています。でも、ほくはお母さんのそんな手が大好きです。

お母さんは、家の中の仕事をするだけではなく、夜遅くから朝ぼく達が起きるまで、コンビニで働いてくれています。

お母さんの手は、仕事中に段ボール箱で切ったあとや、フライヤーでやけどしたあとなどがあり、キズが増えるたびに、今日もほく達のために、一生けん命働いてくれたんだと、ほくは思います。だから、ほく達のために頑張ってくれている母の手が大好きです。そして、その手で頭をなでてくれたり、だきしめてもらおうと、とても心地よく安心します。

お母さんは、どんな時でも笑顔でいます。

仕事から帰宅して、ほく達を学校に送り出してから、今度は家の中の仕事をして、やっとなれます。ねるのも、四時間位で、ほく達が学校から帰宅すると、また家の中の仕事をします。すごくつかれているはずなのに、母はいつも笑顔で

「おはよう・行ってらっしゃい・お帰り・おやすみ」を言ってくれます。母は、どんなに自分がしんどくても、いつも笑顔を見せてくれます。

例えば、お兄ちゃんを出産する時も母子ともに危険な状態で、きん急帝王切開になった時も、すごく痛かったはずなのに、どの写真も笑顔でいるし、具合が悪くてしんどい時も、笑顔で「大丈夫だよ」と言ってくれます。ほくはそんな頑張り屋のお母さんの笑顔が、本当に大丈夫なのか少し心配になるけど、大好きです。

ほくのお母さんは、少し変わっています。ほくが注意をされて泣いてしまうと、「だれが悪い？自分が悪い時は、泣かない。」

「女の子のなみだは武器になるけど、男の子のなみだは、大切な人が亡くなった時まで流さない」

「学校も勉強も嫌なら、行かなくてもしなくてもいい」
「友達も、たくさん作らなくてもいい」

「勉強がよくできるよりも、人に思いやりを持ち、礼儀作法がちゃんと出来る方がいい」など、他の人は子どもに、こんな事を言わないんじゃないかと思うことを言う。ほくのお母さんは少し変わっているが、どの言葉も、ほくの心にひびいています。

ほくは、お母さんの手も言葉も歌声も、全部好きです。つまり、お母さんが大好きです。お母さん、いつもありがとう。これからもよろしくお願ひします。

祖父にささげる金メダル

安田 悠真

僕の祖父は、小さな巨人だ。体は小柄だが、心には強さと優しさを秘めている。祖父に会うと誰もが笑顔になるし、みんなの悩みを一瞬で解決してしまう。運動が苦手な僕に竹馬の乗り方を教えてくれたのも、逆上がりの練習に付き合ってくれたのも、みんなみんな祖父だった。僕の「できた」を、いつだって応援してくれた祖父。僕は祖父が大好きだ。

祖父の部屋には、器械体操のあん馬を乗りこなす、若かった頃の祖父の写真が飾られている。軽々とあん馬に乗る姿は、今にも写真から飛び出してきそうだ。でも、この写真の奥には、優しい祖父からは想像もできないほどの苦しい経験が詰まっていた。

ある日、祖父の部屋で写真を見つめる僕に、祖母が打ち明けてくれた。祖父が器械体操の選手で、東京オリンピック出場を目標にしていたこと。ある日、練習中に腰を痛めて、体操を続けられなくなったこと。悔しさと悲しさで、何も手に付かなくなったこと。そして、運動の楽しさを伝えようと立ち上がり、体育教師になったこと。祖父にこんなに辛い経験があったなんて、僕は少しも知らなかった。心に浮かぶのは、いつもの温かい笑顔ばかりだ。僕はこの日、祖父の強さと優しさの意味を知った。そして、僕を支えてくれる祖父に、何かできないかと考えるようになった。

今年にはオリンピックが開催された。五十七年ぶりの東京での開催。祖父はどんな思いで試合を見ているだろう。僕は祖父の背中を思うと、胸が押しつぶされるような気がした。そして、男子体操チームが銀メダルを獲ったあの日。祖父はテレビで嬉しそうに観戦していた。まるで自分のことのように目を細めて喜ぶ祖父の姿を見ていた時、僕は何かにつき動かされるように、自分の部屋に駆けこんだ。どうしてもやりたいことがあったからだ。

次の日の朝、僕は祖父に金メダルを渡した。折り紙で作った、小さな小さなメダルだ。子どもっぽくて、祖父は恥ずかしがるかもしれない。そう思ったけれど、僕は心をこめて作った。祖父への感謝の気持ちも、どうしても伝えたかったのだ。手作りの金メダルを渡した時、祖父はしばらくだまっていた。やっぱり嫌だったかな。心配する僕に、祖父は目に涙をいっぱいためて、ありがとうと伝えてくれた。祖母が、涙もろいところは相変わらずね、と笑って祖父の背中をなでた。祖母も僕も泣きそうだった。三人で泣き笑いしながら、祖父の首にかかった金メダルを眺めた。大きな歓声も、表彰台もないけれど、とても幸せな、満ち足りた時間だった。

僕は祖父がとても誇らしい。祖父の孫に生まれたことも、祖父に運動の楽しさを教えてもらえたことも、それらの思い出全てが、心の中で輝いている。祖父は僕の太陽だ。これからも、祖父への感謝を胸に、毎日を元気に過ごしていこう。